

立花北枝の研究

-芭蕉との出会いと俳諧活動を中心に-

李 炫 瑛*

目 次

1. は活動とその 作品
 3. 芭蕉とのじめに
 2. 初期俳諧出会いと俳諧開眼
 4. 『卯辰集』以後の俳諧活動
 5. おわりに
-

1. はじめに

立花北枝は、蕉門十哲の一人として知名度は高い俳人ではあるが、俳諧活動とその作品に対する評価はそれほど高くはない。同じ蕉門十哲の一人である森川許六は俳諧論書『俳諧問答』の中で「北枝は才能はあるが、師説に疎く真の正風に迫り得ていない。自己の目だけで物を見て、世間の流行を見習っているので、表面だけの面白さで終わっているものが多い」と批評している。

彦根の武士である許六の芭蕉への入門は北枝より三年遅いものの、推敲と改作に腐心した努力家で、画道においては芭蕉の師であった許六からすれば、僻遠の加賀に住む刀研師北枝は凡庸な人物に過ぎなかったかも知れない。さらに、これまで北枝の作品は芭蕉七部集に選ばれた作品を中心に評価されがちで、北陸特有の自然と風土などに通じない批評家らに読まれたりしたので、実力以下に評される傾向があった

* 건국대학교 일어교육과 조교수

のも事実である。

したがって本稿では、彼の初期俳諧活動から芭蕉との出会いを通して俳諧へ開眼していく過程、もっとも活躍していた頃、自ら編纂した『卯辰集』の成立とその作品、また同じ時期に芭蕉の門人によって京都で編纂された『猿蓑』を含む、芭蕉七部集の作品を通して彼の作品趣向と加賀俳壇での位置を調べ、さらにはそれ以降の作品についても検討し、作品傾向と特徴を考察してみたい。

2. 初期俳諧活動とその作品

- (1) 『白根草』・『加賀染』、そして『雪之下草歌仙』の作品
『俳文学大辞典』¹⁾によれば、北枝は、

俳諧作者。?～享保3(1718)5・12。立花氏(土井氏とも)。通称、研屋源四郎。別号、鳥(趙)翠台・寿天軒。加賀小松に生まれ、のち金沢住。兄の牧童とともに研刀を業とした。延宝(1673～81)末期、『白根草』『加賀染』に入集、談林俳諧に親しむ。貞享期(1684～1688)には、『稲筵』『孤松』に入集。

と記している。

まず、『白根草』(延宝八、1680)は、京都生まれで北村季吟に師事した神戸友琴(1706年没)が亡父母の追善供養のために、全国の俳人に依頼して編んだものである。巻頭句は季吟で、続いて維舟、西武、梅盛、貞室、似船といった錚々たる俳人の作品が並んだ。そこに友琴の弟子格の北枝とその兄牧童の作品が入集したのである。

露の身の果ては五尺の松じやまで 土井北枝
年を経てや花の手鑑仏の水 立花松葉

両句とも形式的な追悼句に過ぎず、北枝の後の「立花」姓が、ここでは「土井」姓となっていること、牧童の古い俳号が「松葉」であったことに注目される。

次に、北枝の作品の現れる『加賀染』(天和元、1681)は、加賀宮腰に住む杉野長之・久津見一平編で、加越能に住む貞門・談林系俳人の作品を収録したも

1) 『俳文学大辞典』(角川書店、1995)・p.450

ので、ここで北枝は14句、牧童は25句を収めている。

その声や昼なく炭団売 土井北枝
 さればこそ秋のはじめをけふそと 土井北枝
 秋や来るこよりやまがふ鼻の穴 土井北枝

「その声や」の句は、顔や体を黒々と汚して日中に売り歩いている炭団売りの姿を、昼は黒い姿で地上を這っている蛭になぞらえた句であり、「さらばこそ」「秋や来る」の2句は『古今和歌集』所収の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかさねぬる」（藤原敏行）を踏まえた作品である。

しかし、蕉門俳人である支考の『草刈笛』（元禄十六、1703）の「牧童伝」に、「牧童はもと小松の素姓にして、賀の金城に居る事年ひさし、家は研刀のわざをもて、よのつねのたつきとはなせり。牧童が彼が兄にして、北枝は是が弟也」と記しているように、これらの作品集以前、延宝七年頃（1679）刊行したとされる上巻のみの零本『雪之下草歌仙』（加賀国金沢連衆の談林風歌仙一六巻を所収）には、牧童の前号である立花松葉という名と、立花可融という名が登場する。加賀国金沢連衆の談林風歌仙一六巻を収めているこの俳諧連句集は、金沢関係の俳書としては「菊酒付句」（延宝四年刊か）、「越路草」（延宝六・七年刊か）について古い俳書であり、歌仙俳諧撰集としては、延宝六年刊の『江戸十歌仙』、延宝七年刊『俳諧中庸姿』、延宝八年刊『大坂十歌仙各盃』などに比肩する早期の撰集である。さらに金沢居住の地方俳人が、中央俳風である談林風を巧みに模倣して興行した作品集である。そこに立花可融と立花松葉の名が見られるのである。一六巻中、可融が七巻、松葉が九巻に参加し、二人同座したのも二巻ある。

五吟

棒の先や紅葉の片荷夕日影	立花松葉
尾華ミだれて水桶の波	円藤廻扇
竜頭露の玉にや歎覧	立花可融
あつはれ大将月出る空	小川野水
五つ入跡なき雲と成にけり	宇野一烟

これらのことから立花可融から土井北枝に改号した時期は、延宝七年頃（1679-1680）ではないかと考えられ、『白根草』以前の作品の存在も確認できる。当時、北枝は兄の牧童と共に俳諧を嗜んでいたことが分かる。

(2) 『稲筵』『孤松』、そして『楚常手向草』の作品

『加賀染』に続いて北枝の作品が現れるのは、貞享2年刊の『稲筵』（1685、出羽尾花沢の鈴木清風編）、更に貞享4年刊の『孤松』（1687、尚白編）である。

巻き尽くす枕絵甘し秋の暮 『稲筵』
 楊貴妃の捨沓掛けん柳かな 『孤松』
 山隈に知らぬ坊見る蚊遣かな 『孤松』

「巻き尽くす」の句は、秘事を描いた浮世絵などの絵巻物に見惚れていたが、それも終りを告げ、窓外には秋の夕暮が迫っていると言った、実に微妙・複雑な心理状態を情感豊かに描いている。「楊貴妃の」の句は、青柳の小樹に唐代の美女楊貴妃の忘れていったこの華奢な小沓を掛けて行こうか、といった全くの想像句ではあるが、作者の若い感情と浪漫性といったものが強く感じられる句である。この二句に見られる北枝の豊かな空想性や叙情性などから、彼の二十代の作品ではないかと考えられる。「山隈に」の句は、山路でふと見た景を即興的、スケッチ風に描いた素直な叙景句ではあるが、「知らぬ坊」「蚊遣かな」に軽い驚きや旅情、遁世の僧のゆかしい生活や住居への共感や羨望の情が漂っていて味わい深い。

さらに『楚常手向草』は、貞享五年七月二日に二六歳の若さで没した加賀鶴来の俳人金子楚常の追悼のために、生駒万子（楚常の俳諧初学の頃の師）や句友の北枝・牧童らが纏めたものである。集中の北枝の作品は、

しかしかのよし母のもとより告こし侍りぬ 其返しに、
 来る秋を好きけるものを袖の露 北枝
 其ころのすさび
 身に泣きて打ちふるはるれ秋の風 北枝
 三ヶ月の出ても暮す気ぐるしや 北枝
 餞別の事を思ひ出て
 波団扇つよさにながき形見かな 北枝

の4句でもっとも多い。秋を愛した親友の面影への落涙、秋風や三ヶ月への哭泣や憂情、また形見の波団扇の「つよさ」に亡友の夭折・薄命をしみじみと嘆ずるなど、『白根草』の決りきった「露の身の果ては五尺の松じやまで」の追悼句とは違ってそ

の哀惜や感傷には真実が籠もっていることが感じられる。

この時期から、初期の作品に見られた談林俳諧の名残を徐々に脱していることが確認できる。

3. 芭蕉との出会いと俳諧開眼

『楚常手向草』に続く北枝作品の見られる撰集は元禄二年（1689）三月に芭蕉が序を書いた『あら野』（尾張の山本荷兮編）である。ここには、加賀俳人の12句が収められている。

わが草庵にたづねられしころ

恥もせず我なり秋とおごりけり 北枝

北枝の句は一句のみで、佳吟とは言えないが、前書が重要な意味を持っている。すなわち、「おくのほそ道」の旅中、金沢を訪ねた芭蕉が北枝の草庵を訪ね、北枝はこの時初めて芭蕉に会い、入門することになったのである。句意は「貧しい住居や不十分なもてなしの失礼を詫びつつも、せめて我が草庵の秋—豊かな秋の景色をめでただけたい」という謙譲の思いと風雅の心を素直に表現したものである。

若い一介の研師が草庵の秋景を愛でつつ俳諧に精進し、亡き句友楚常の追悼句集までもまとめあげていることなどに、旅上の芭蕉は深く心魅かれたと考えられる。七月一七日の草庵での対座、歓談以後、二人の交情は、深いものになっていくのである。北枝の師への異常なまでの親近、崇敬がその後の彼の俳諧への傾倒、『卯辰集』の編集、『猿蓑』、『炭俵』、『続猿蓑』への入集、書簡の交換へと連なっていくのである。

(1) 北陸路の芭蕉と北枝

元禄二年（1689）三月、「おくのほそ道」の旅立った芭蕉は、

七月十五日 芭蕉、金沢到着

七月十七日 「翁、源意庵へ遊」（「曾良日記」）

源意庵は立意庵で、北枝の庵か

立意庵において秋の納涼

赤々と日はつれなくも秋の風 芭蕉

入相や盆の過たるかねのおと 小春

- 橋見れば少し残暑のささへたり 北枝 (『俳諧秋扇録』)
- 七月二十日 源意庵の松玄庵にて、芭蕉・曾良・乙州・一泉・松・北枝ら半歌仙。夕方、野畑ニ遊。(「曾良日記」)
- 残暑しばし手毎に料れ瓜茄子 芭蕉
みじかさ待たで秋の日の影 一泉
ともしび消ゆれば雲に出る月 北枝
糸かりて寝間に我がぬふ恋ごろも 北枝 (「花の故事」)
- 野田の山もとを伴ひありきて
翁にぞ蚊帳つり草を習ひける 北枝 (『卯辰集』)
- 七月二十一日 「翁ハ北枝・一水同道ニテ寺ニ遊。」 (「曾良日記」)
- 七月二十三日 「翁ハ雲口主ニテ宮ノ越ニ遊。」 (「曾良日記」)
- 宮越にて表六句
小鯛さす柳すずしや海士が妻 芭蕉
ぬぎ過し羽織にのぼる草の露 北枝 (『奥細道付録』)
- 七月二十四日 「金沢ヲ立。一小松ニ着。一北枝隨之。」 (「曾良日記」)
- 七月二十五日 「(翁)欲小松立、所衆聞テ以北枝留める。山王神王藤井伊豆宅へ行。」 (「曾良日記」)
- しほらしき名や小松ふく萩芒 翁
露を見しりて影うつす月 鼓蟾
躍の音さびしき秋の数ならん 北枝 (『金蘭集』)
- 七月二十六日 「今日ハ歎生方へ被招。俳五十句。」 (「曾良日記」)
- ぬれて行や人もおかしき雨の萩 芭蕉
すすき隠れに薄蕨く家 享子
月見とて狐にも出ず船あげて 曾良
干ぬかたびらを待たぬるなり 北枝 (『金蘭集』)
- 七月二十七日 八幡へノ奉納ノ句有。予・北枝隨之。(「曾良日記」)
- あなむざんやな甲の下のきりぎりす 翁
幾秋か甲にきへぬ鬢の霜 曾良
くさずりのうち珍しや秋の風 北枝 (『卯辰集』)
- 七月二十八日～八月四日 山中滞在。この間に「山中三吟」成立。
元禄二の秋、翁をおくりて山中温泉に遊ぶ 三両吟
- 馬かりて燕追ひ行くわかれかな 翁
花野みだるる山の曲りめ 曾良
月よしと相撲に袴踏ぬぎて 北枝
- 八月五日 昼時分、翁・北枝、那谷へ趣く。明日於小松、生駒万子為出会也。良刻立。大正侍(大聖寺)ニ趣。(「曾良日記」)

の旅程を終え、芭蕉・北枝は曾良と別れ、那谷寺を経て、再び小松に戻るが、小松で幾泊したかは不明である。以上の旅程からも分かるように、北陸での二十余日間、北枝は芭蕉とともにしながら以前味わうことのできない俳諧世界を経験したのであろう。

(2) 北枝の俳諧開眼

元禄二年八月五日曾良が山中温泉で師と別れて西に旅立ち、芭蕉は北枝と共に「生駒万子為出会也」に再び小松に向かった。それゆえ「曾良日記」ではそれ以後の芭蕉の行動は一切記されておらず、小松での二人の行動も明らかではない。しかし、そのあとの芭蕉と北枝の行動は、「おくのほそ道」の記述によって明らかである。

芭蕉は「おくのほそ道」の旅中において、多くの地方俳人達とさまざまな接触と、交誼を持つが、七月十七日から八月十日前後までの、二十日間ほどにわたる北枝とのさまざまな交情は例外と言ってもよいほど特異なものであった。この点に関しての研究はこれまで少なかったが、北枝の作風の変遷を論じる場合、北枝が芭蕉から受けた影響を無視することはできない。したがって元禄二年秋以降の作品、とくに『卯辰集』所収の作品以後を北枝の発展期・成熟期といって中期の作品と位置づけられよう。

さて、芭蕉はどうして多くの金沢俳人のなかで、特に北枝に交情を寄せることになったのか、北枝は芭蕉を崇敬し、その好意に甘え得たとしても、長期にわたって深交を結び得たのか、考えさせられる。

その理由の中には、彼の俳諧への愛情と師への尊敬の念・情熱、商用で頻繁に金沢と京を行き来していた乙州との交友、田中一閑に師事した鶴来の俳人金子楚常の存在、刀研師としての万子との関係、兄の影響などが考えられる。

元禄四年、北枝によって編纂される『卯辰集』の中の作品を取り上げてみると、

橋桁や日は射ながら夕霞
さびしさや一尺消えてゆく螢
川音やむくげ咲く戸はまだ起きず
唐崎の鮎煮る霜の月夜かな

など、これまでの初期の作品とは違って、自然への観照姿勢も客観的に深まりを見せ、人事把握においてもより人生的普遍的な情感を奥深くたえていることに気づく。

七月二十日、師芭蕉と共に金沢の「夕方、野畑ニ遊」んだ折の感激と思慕を『卯辰集』のなかで「野田の山もとを伴ひありきて 翁にぞ蚊帳つり草を習ひける」と作品

化しているが、この時北枝が「習」ったのは一つの植物名ではなく、自然の実相を凝視する目と、自然への深い慈愛の心ではなかったかと考えられる。

芭蕉は生涯にわたっていつでも作品の推敲、改変に腐心した人であるが、「おくのほそ道」の二十日間の随伴において、北枝がもっとも感銘を受けたのは、自然や人間の凝視以上に、師の推敲、斧正の態度の厳しさだったかも知れない。それは『卯辰集』の末尾に収められた「山中三吟」の定稿に至るまでの、芭蕉の添削・推敲指導の詳細を充実に伝える「山中問答」（北枝著）所載の「曾良餞、翁直しの一卷」の記述である。師芭蕉の口から発せられる一言一句を緊張の面持ちで待つ北枝、その的確な推敲、添削に得心する北枝、沈黙のままに己れの句を容赦なく斧正し続ける芭蕉、師から「前句に心ありて感心なり」と賞賛され、感激する北枝の姿など、実に生き生きと句座の内実を再現させる記述ばかりである。

(3) 『卯辰集』の成立とその作品

北枝が編纂した『卯辰集』という俳諧撰集の書名は、加賀の俳人句空宛芭蕉書簡（元禄三年十一月上旬以前）に、

集之題号、卯辰集と可有哉。山の字重き様に被存候。是も拙者好ニ而も無御座、其元評判ニ御まかせ可被成候。以上。

とあるように、はじめは句空の住む山名によって「卯辰山集」と考えられた。しかし、「山」の字が重いという芭蕉の意向によって『卯辰集』と改められたものである。『卯辰集』に対する芭蕉の関心の深さが感じられるところである。

また、『卯辰集』は、句空の序文に、

この言草はこしのしら根の榊、鶴来の里楚常子、歌林にたのしむあまり、かつ実を拾ひ、すき人どもに味はらせんことをおもひしかど、その秋はじめかし世を夢になしぬ。

と記されているように、元々鶴来の俳人楚常が収集した貞享末年の遺稿をもとに、北枝が増補・刊行したものである。

具体的にその構成と内容を検討してみると、次のようになる。

『卯辰集』は上・下二冊の半紙本で、京都の井筒屋庄兵衛と金沢の三ヶ屋五良兵衛で相板された。上巻は四季別発句集で、冒頭に桑門句空の序を掲げ、巻第一に春の発句一六〇句、巻第二に夏の発句一二三句、巻第三に秋の発句一五三句、巻第四に冬の発句七一句、計五〇八句（付句一）を所収。また下巻は連句

集で、北枝・曾良・芭蕉による「燕歌仙」を含めた、「柿喰三吟」「琵琶五吟」「霜六吟」の四巻を収めている。

まず、発句部の巻頭と巻軸の作者構成をみると、次のようになる。

<表1>

各巻	巻頭・巻軸	巻頭句	巻軸句	總句數
	巻第一	其角 (江戸)	野水 (尾張)	一六〇
	巻第二	句空 (金澤)	自笑 (山中)	一二三
	巻第三	翁 [芭蕉]	越人 (尾張)	一五三 (付句一)
	巻第四	楚常 (鶴来)	牧童 (金澤)	七一

巻頭と巻軸には、芭蕉をはじめ、江戸・尾張・加賀の俳人をバランスよく配置している。北枝は、元の選者である楚常だけでなく、序文を書いた句空も、それ相当の適所に配している。しかし、選者である北枝の名は見ない。そして、四季別総句数から判るように、冬の句数は他季の半数位で、若干バランスがとれていないことが指摘できよう。

次に俳人別の入集句数を見ると、北枝（加賀金沢）三四句、楚常（加賀鶴来）三〇句、牧童（加賀金沢）二八句、翁（伊賀上野、江戸住）二〇句、句空（加賀金沢）二〇句、李東（加賀淵上村）一六句、秋の坊（加賀鶴来）一五句、四睡（加賀金沢）一二句、万子（加賀金沢藩士）一一句、雨邑（未詳）一一句、乙州（近江大津）一〇句の順で、一〇句以上入集した俳人が十一人いる。そのうち、芭蕉・乙州以外はすべて加賀の人である。そして各巻頭・巻軸を飾っている芭蕉・其角・野水・越人のほかに、尾張の荷兮・旦藁、京の加生・去来、近江の乙州・知月、江戸の路通・杉風、そして大坂の何処ら、加賀以外の各地の蕉門俳人が多く入集している。これは、『卯辰集』が一地方の俳諧撰集でありながらも蕉風の流れを引いた撰集であることを語ってくれるものである。

ここで『卯辰集』所収の北枝の作品を検討してみよう。

まず、芭蕉と出会う元禄二年初秋前までに詠まれたと考えられる作品群である。その多くは鶴来の金子楚常が編纂した『卯辰集』草稿に収められていたと推定される作品で幾つか取り上げてみることにする。

- ① 四日には寝てもや春の花心
- ② 寝る所ありて行くらめたつ胡蝶
- ③ 旅行
風流の国主なるらん山ざくら
- ④ とにかくに 胸うごく若木の桜かな
- ⑤ 夕顔に片尻懸けぬさんだはら

- ⑥ 楚常身まかりよし、母のもとより告来したる返しに
来る秋を好きけるものを袖の露
- ⑦ 七月既望
高灯笼しばらくあつて嶺の月
- ⑧ 月を松にかけたりはづしても見たり
- ⑨ とかく悲しき時
ひえながら打寝て時雨聞くばかり
- ⑩ 野田山
なんの実ぞ たまたま見出す雪の門

これらの作品は、北枝の初期の作品であった談林俳諧の趣向を残しているのである。①③⑧などは底の浅い風流心を玩んだ月並調であり、②④⑧は説明や理屈に流れた句であり、④⑤⑩の線を引いた所は、宗因流の俗語や口語や俳言など、そして謡曲調に主眼を置いた作品である。

⑥⑦⑨は説明的な作品ではあるが、それぞれ前書と関連させて味わうと、北枝の自然な感慨や詠嘆がすなおに心に伝わってくる。⑥の句は秋の季節を愛しながらも貞享五年の秋も見ず没した俳友の楚常を追悼した作で、「楚常手向草」（元禄元年稿）に初載された作品である。⑦の「既望」は、「望月」をすぎた十六夜の月の意で、「七月既望」は七月十六日の盂蘭盆会で、亡き人の霊を招来しようと高灯笼に火を入れ、庭先に掲げたが、しばらくして十六夜の月が灯笼の上の山からさし上がり始めたことよ、の句意である。楚常弔問の折の作品ではないかと考えられる。⑨の作品も「とかく悲しき時」の前書から、楚常没年の初冬あたりに成立した作品と考えられ、身も冷えながら寝ころんで時雨の音を聞いている北枝の姿が浮かび上がる句である。

次に金沢を来訪した芭蕉と北枝の交流の中から生まれた作品群である。

- 翁へ蓑をおくりて
白露もまだあら蓑の行衛かな
野田の山もとを伴ひありきて
翁にぞ蚊屋つり草を習ひける
多田の神社にまふでて木曾義仲の願書並びに実盛がよろひかぶとを挿ス三
句くさずりのうら珍しや秋の風
山中の温泉にて
子を抱いて湯の月のぞく猿かな

これらの作品からうかがえるように、芭蕉への思慕や思い出を描いた内容が多いのは、『卯辰集』編集当時、北枝の芭蕉への敬愛と思慕の情が極めて深かったことを証拠立てる作品と言ってよからう。

次に、北枝の新風と俳諧開眼時期とも考えられる元禄三年前後の作品群を取り上げてみよう。

- ① うぐひすのはまり過ぎたる山家かな
- ② 湖や心はしりて四方の花
- ③ 焼けにけりされども花は散りすまし
- ④ 橋桁や日は射しながら夕霞
- ⑤ 麦のためまづ風ゆらぐ雪の上

①の句は、俗語・俳言としての「はまり過ぎたる」の面白さや、静寂たる山家と鳴きしきる可憐な鶯との取り合わせという絵画的、感覚的情趣はあるものの、誇張的で不自然な「はまり過ぎ」の措辞が、なんとなく清楚で閑静な世界を通俗的なものにする嫌いがある。

②の句は「湖や」「心はしりて」と若い北枝の性急な主観や叙情性が先行し、句としての形象化や求心性においては曖昧なところはあるが、若々しい叙情性や素直な心情表白は評価すべき作品である。

③の句は、「元禄三のとしの大火に、庭の桜も炭に成たるを」の前書が付いている。この火災で金沢の西北部はほとんど壊滅し、北枝・牧童さらに句空の住居も焼失したのである。この時の北枝宛芭蕉書簡には、

池魚の災承、我も甲斐の山里に引移り、さまざまの苦勞いたし候へば、御難儀の程察申。されども、焼けにけり、の御秀作、かゝる時に臨、大丈夫感心、去来・丈草も御作驚申斗ニ御座候。(元禄三年四月二十四日付)

とあって、芭蕉自らも深川の草案を焼亡の憂き目に遭った経験を語り、北枝に同情を示すとともに、大火の最中に得たこの作品を讃え励ました。焼跡に一人佇み、過日の絢爛たる桜花を白昼夢のごとく幻視する北枝の繊細な感性と、純たる耽美の詩心がよく表現された佳吟である。

④の句は、北枝の俳諧への悟達、すなわち自然への凝視や実相への静かな観入、平明な表現が実を結んだ作品である。暮れなずむ晩春の一日、金沢の町中を大川が静かに流れている。彼方に掛る浅野川大橋の長い橋桁に、折しも夕陽が射し

ながら淡い霞が立ち込めていることよ、といった句意である。近景を省略し、中景の橋桁と夕霞、遠景としての夕映えの天空をおおらかに表現し、晩春特有の風景を伸びやかに描いた情景句である。

元禄二年秋の芭蕉との邂逅、入門をきっかけとして蕉風俳諧に覚醒し、談林調の旧套依然とした表現から脱した、新しい俳風への移行がうかがえる作品である。

(4) 『芭蕉七部集』所収の作品

『卯辰集』に続く北枝の作品が収められた撰集には、元禄四年七月に刊行される『猿蓑』（去来・凡兆編）があげられる。ここにはわずかに二句しか収められていない。

下記の二句は、すでに『卯辰集』に収載された北枝の作品で、『卯辰集』以外の新作は一句も選ばれていない。さらに『猿蓑』に収められた加賀蕉門の作品も塵生・句空・桃妖の三句²⁾に過ぎない。

わが草庵にたづねられしころ
 恥もせず我がなり秋とおごりけり (『あら野』)
 庚午の歳家を焼きて
 焼けにけりされども花は散りすま (『猿蓑』)
 贈蓑
 しら露もまだあらみのの行方かな (『猿蓑』)
 柿の袈裟ゆすり直すや花の中 (『炭俵』)
 来る秋は風ばかりでもなかりけり (『炭俵』)
 朱の鞆や佐野へわたりの雪の駒 (『炭俵』)
 一田づつ行きめぐりてや水の音 (『続猿蓑』)
 こほろぎや顔に飛びつくふくろ棚 (『続猿蓑』)
 しぐれねば又秋風の只をかず (『続猿蓑』)

『あら野』と『猿蓑』の三句は前書の内容から判るように、「恥もせず」「しら露」の二句は、北枝と芭蕉の交流の具体的な背景を知らないと、その句中の心情や詠嘆が理解しにくい。また、北枝の作品の中でもっとも知られた「焼けにけり」についても、俗事にこだわらない彼の風流・風雅の心情は評価するとしても、「焼けにけり」の表現の不明さや、「されども」の散文的・説明的な措辞は、一句として完結性を

2) 「白波やゆらつく橋の下紅葉 塵生」と「むめが香や分け入る里は牛の里 句空」と「紙鷺切れて白根が嶽を行衛かな 桃妖」の三句である。

低くしている。

「柿の袈裟」は地味な柿色の袈裟を付けた僧か山伏の、桜花への耽美を軽く描いたものであり、「来る秋は」と「朱の鞍」は『古今和歌集』³⁾と『新古今和歌集』⁴⁾の名歌の換骨奪胎であろう。

「一田づつ」は水田と水音という平凡で単純な素材を描きながら、広々とした加賀平野の青田風景と自然界の生動の気を嫌味なく写實的に表現している。「こほろぎや」は床の間の袋戸棚の戸をあけるとコオロギが顔に飛び付いたとの意で、その驚きと晩秋とも取れる季節感を即興的に詠んだ軽みの句である。「しぐれねば」の句は、「今日、わびしい時雨は降っていないが、それに代わって北風が庭前の松に吹き、自分の心をそっとさせてくれないことよ」との意味で、北陸の初冬の気象や風土感をよく表している。

以上の作品からは、初期作品に多い理屈的な発想や表現法が多少目につくものの、それよりも北国人特有の微妙な心情、心理、そしてそれに伴う北陸の初冬の気象状況や風土感が描かれている。

4. 『卯辰集』 以後の俳諧活動

北陸における本格的な俳諧撰集は元禄四年五月に北枝によって刊行される『卯辰集』であることは言うまでもない。これが一つの契機となって以後、加賀国では元禄期に「色杉原」「西の雲」（元禄四）、「北の山」「柞原集」「鶴来酒」（元禄五）、「猿丸宮集」「薦獅子集」（元禄六）、「卯花山」「名月集」（元禄七）など、元禄十六年まで多くの俳諧撰集が編纂される。そのほとんどは蕉門系のものであり、作者の大半も北陸の人である。芭蕉が「おくのほそ道」の途上で播いた風雅の種子の開花がいかに大きなものであったかがうかがえる。

しかし、これらの俳諧撰集において北枝の作品を読んでいくと、『卯辰集』に比べその作品の多さにも関わらず注目すべき作品が少ないということである。『卯辰集』を編纂した頃、北枝は三十歳位であり、以後の俳諧創作活動においては充実・円熟期でもあるべきなのにこのような実情は何に起因するのであろうか。現在、残っている北枝の伝記的資料と文献は非常に乏しいので、その理由や経緯を明らかにすることは混乱であるが、幾つかの問題点を記しておく、次のようになる。

3) 「秋来ぬと目にはさらかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」（『古今和歌集』、藤原敏行）の歌である。

4) 「駒とめて袖打ち振ふ陰もなし佐野のわたりの秋の夕暮」（『新古今和歌集』、藤原定家）の歌である。

まず『卯辰集』の刊行をめぐる芭蕉と北枝、そして句空の間に意見の相違があったことと関連して、金沢蕉門の北枝が、元禄二年以後の芭蕉の追求していた「軽み」の新風を理解しえなかったことであろう。すなわち、北枝は、日常生活のなかでの実感や発見を重んじ、それを平明な日常の言葉で詠んだといった元禄四・五年頃の芭蕉の新しい俳諧観に気づかず、だんだん題詠・月並調に傾いていたことが挙げられよう。

次に元禄四年前後、芭蕉は去来・凡兆と共に『猿蓑』の編纂に心を注ぎ、僻遠の加賀に住む北枝は元禄二・三年頃のように師から手厚い指導を受けることが不可能だったと考えられる。

次に金沢俳壇に大きな影響を及ぼした近江蕉門の尚白や千那たちが、元禄四年九月尚白が刊行を予定していた「忘梅」の序文をめぐる芭蕉との間に軋轢を起し、以後芭蕉との関係が疎遠になったこと、また商用で足繁く金沢を訪れ、蕉門や上方俳壇の作風などを伝授していた乙州が元禄四・五年に江戸へ旅立ったことも、北枝の俳諧的視野を狭めたことになったろう。

さらには『卯辰集』の刊行で知名度を高め、加越能での俳壇的勢力を広めた三十代の北枝が、作品の質的な向上や新風への模索・脱皮の努力を忘れ、古い宗匠的な姿勢に傾き、社交や挨拶、吟行や旅行などと濫作的な傾向を帯びて来たこともその原因⁵⁾であろう。

にもかかわらず、北陸地方特有の風土色や、庶民生活の哀歎など、北陸ならではの素朴な題材を詠込んだ佳吟も少なくない。それこそ地方俳人である北枝の作品を読んでいく際に注目すべきところであろう。

行く川のあなた北斗の朧かな (『鶴来酒』)

木枯や更け行く夜半の猫の耳 (『猿丸宮集』)

夕立の跡袖の薫る日陰かな (『猿丸宮集』)

「行く川の」の句は、北陸の雪解けの水を湛え滔滔と流れる豪快な奔流と、その上に拡がる廣大無辺の春夜の天空、朧月の淡い光とやさしく融け合いつつその天空の一面に雄大に散在する北斗の七つの星影が映発・調和し合って迫真的な自然詠となっている。

5) この点、「水せき入れ、橋をつくりたる庭を 香を持つか梅散る下の波がしら」(『北の山』)、「霞夕追善 若竹の籬びて枯るるたぐいかな」「卯辰山禅林にて 麻の香のくるも涼しや寺の庭」「秋之坊閑窓によりて 虫の音にしばし細かれ丈夫心」(『柞原集』)、「乙州に別れる時 語るにも夜ながくなりて別れけり」(『猿丸宮集』) などのような月並句や前書などを見ればよく理解される。

「木枯や」の句は、外は木枯らしが荒々しく吹きすぎ、北国の初冬の夜、しんと更け行く。淡い灯影に浮かぶ寒々とした我が屋の片隅では、今しも家猫が眼を鋭く光らせ、木枯らしの響きの底に何者かの音を探るかのように、耳を立てているよ、との意味の作品は深夜に吹き荒れる木枯らしと、その風音に耳を澄ます猫の姿を現象的で即物的に表している。

「夕立の」の句は、ある夏の日の午後、突然青空が急変し、激しく夕立が降ってくる。路上をかける人々、洗濯物を慌てて取り込む人、庭の池水を白々と打つ太い雨脚。やがて低い雨雲が去り、再び青空が拡がり、まるで先の雨が嘘であったかのように、燦々と真夏の太陽が輝き注ぐ。北枝は障子を開き縁にでて、その涼風の中に香しい花の香を感じ、眼を隣家の背戸に向ける。そこには、古い土蔵の日陰に、柚子の白い可憐な花が風に揺れつつ咲き匂っているのである。この作品には、北枝の卓抜な感性と繊細な感覚がよく表現されている。

北枝は享保三年五月十二日、臨終前の病床で 次のような辞世句を残している。

書いて見たり消したり果はけしの花 (『けしの花』6)

北枝は自分の死の迫っていることを知り、「願はくは古翁(芭蕉)の忌日に終とらんと。はたして五月十二日ただちに揮毫の一句を残す。書いて見たり消したり果はけしの花 是を手づから予にあたへて、永く詠吟の唇を閉」と、『けしの花』の編者である覇充が記している。自分は今、死を前にして、今生最後の句を書いてみたり消してみたりしながら、あれこれと案じているが、その果は芥子の花のようにはかなく消してしまう、我が俳諧の花よ、との意味であろう。下五の「けしの花」に「消し」の意を掛け、過去の俳諧活動の一切を否定する虚無的な心情や高悟達観といったものではなく、芭蕉の五十年の生涯や大坂での客死などを思い浮かべたりしての、己が非才と凡庸さへの謙遜の情の表現であろう。この時、北枝の胸中に亡師の辞世吟「旅に病んで夢は枯野をかけめぐると、俳諧への執着と精進を思い出したかも知れない。

6) 『けしの花』(覇充著、享保3年)、北枝の辞世撰集。

5. おわりに

以上、加賀俳人立花北枝の俳諧活動について、元禄二年初秋、芭蕉との出会いを中心に検討してみた。

まず、北枝の初期俳諧活動がうかがえる作品集には、『白根草』をはじめ、『加賀染』・『雪之下草歌仙』・『稻筵』・『孤松』、そして『楚常手向草』が挙げられる。初期の作品には談林俳諧の影響が強く見られるが、『孤松』以降の作品からは徐々に談林俳諧の趣向から脱しつつあることが確認できた。

その後、元禄二年初秋「おくのほそ道」旅中の芭蕉に出会った北枝は、北陸に逗留する二十余日間、芭蕉に随伴しながら新しい俳諧を接し、蕉風俳諧に開眼することになり、二人の交情は深まっていく。さらに、北枝によって『卯辰集』が編纂され、加賀蕉門の旗揚げを世に知らしめた。そこに収められている北枝の作品からは、元禄二年秋の芭蕉との邂逅、入門をきっかけとして蕉風俳諧に覚醒し、談林調の旧套依然とした表現から脱した、新しい俳風への移行がうかがえる。

以後、『芭蕉七部集』に収められた作品には、初期作品に多い理屈的な発想や表現法が多少目につくものの、それよりも北国人特有の微妙な心情、心理、そしてそれに伴う北陸の初冬の気象状況や風土感が描かれて注目される。

しかし、『卯辰集』以後の北枝の俳諧活動と作品は注目すべき作品が少ない。その原因については幾つかの問題点を指摘することができた。すなわち、『卯辰集』の刊行をめぐって芭蕉と北枝、そして句空の間に意見の相違があったことと関連して、北枝は元禄二年以後の芭蕉の追求していた「軽み」の新風を理解しえなかったことであろう。日常生活のなかでの実感や発見を重んじ、それを平明な日常の言葉で詠んだといった元禄四・五年頃の芭蕉の新しい俳諧観に気づかず、だんだん題詠・月並調に傾いていたことである。その上、『卯辰集』の刊行で知名度を高め、加越能での俳壇の勢力を広めた三十代の北枝が、作品の質的な向上や新風への模索・脱皮の努力を忘れ、古い宗匠的な姿勢に傾き、社交や挨拶、吟行や旅行などと濫作的な傾向を帯びてきたことも挙げられる。

このような問題点があったにもかかわらず、北枝の作品には北陸地方特有の風土色や庶民生活の哀歓など、北陸ならではの素朴な題材を詠込んだ作品が混在していることには注目される。それこそ地方俳人である北枝の作品を検討する際に注目すべきところであると考えられる。

【参考文献】

- ・尾形 侑（他編）『俳文学大辞典』 角川書店、平成七年、 p.450
- ・長岡博男著 『加賀能登の生活と民俗』 慶友社、昭和五〇年、 p.83-85
- ・大河 蓼々著 『加能俳諧史』 金沢文化協会 昭和一三年、 p.35-40
- ・大河良一校訂 『改訂加能俳諧史』 清文堂 昭和四九年、 p.50-53
- ・殿田良作著 『俳人北枝』 石川県図書館協会 昭和三二年、 p.109-110
- ・山原一布著 『金沢に来た芭蕉』 高島文庫 昭和四二年、 p.47
- ・桜井武次郎 「加賀蕉門と近江蕉門」（『芭蕉・蕪村・一茶』 雄山閣 昭和五三年）、p.131
- ・安東次男 「『卯辰集』という撰集」（『定本芭蕉』 筑摩書房 平成一年）、p.73-74
- ・前田金五郎 「『雪之下草歌仙』 -解題と翻刻-」（関西大学『国文学』 三九号、昭和四一年三月）、p.48
- ・田中良男著 「加賀俳諧史の基調」（『蟻の塔』 229号、昭和二九年）、p.73

要 旨

本稿では、加賀俳人立花北枝の俳諧活動について、元禄二年初秋、芭蕉との出会いを中心に検討してみた。

まず、北枝の初期俳諧活動がうかがえる作品集には、『白根草』をはじめ、『加賀染』・『雪之下草歌仙』・『稲筵』・『孤松』、そして『楚常手向草』が挙げられる。初期の作品には談林俳諧の影響が強く見られるが、『孤松』以降の作品からは徐々に談林俳諧の趣向から脱しつつあることが確認できた。

その後、元禄二年初秋「おくのほそ道」旅中の芭蕉に出会った北枝は、北陸に逗留する二十余日間、芭蕉に随伴しながら新しい俳諧を授け、蕉風俳諧に開眼することになり、二人の交情は深まっていく。さらに、北枝によって『卯辰集』が編纂され、加賀蕉門の旗揚げを世に知らしめた。そこに収められている北枝の作品からは、元禄二年秋の芭蕉との邂逅、入門をきっかけとして蕉風俳諧に覚醒し、談林調の旧套依然とした表現から脱した、新しい俳風への移行がうかがえる。

以後、『芭蕉七部集』に収められた作品には、初期作品に多い理屈的な発想や表現法が多少目につくものの、それよりも北国人特有の微妙な心情、心理、そしてそれに伴う北陸の初冬の気象状況や風土感が描かれて注目される。

しかし、『卯辰集』以後の北枝の俳諧活動と作品は注目すべき作品が少ない。その原因については幾つかの問題点を指摘することができた。すなわち、『卯辰集』の刊行をめぐる芭蕉と北枝、そして句空の間に意見の相違があったことと関連して、北枝は元禄二年以後の芭蕉の追求していた「軽み」の新風を理解しえなかったことであろう。日常生活のなかでの実感や発見を重んじ、それを平明な日常の言葉で詠んだといった元禄四・五年頃の芭蕉の新しい俳諧観に気づかず、だんだん題詠・月並調に傾いていたことである。その上、『卯辰集』の刊行で知名度を高め、加越能での俳壇的勢力を広めた三十代の北枝が、作品の質的な向上や新風への模索・脱皮の努力を忘れ、古い宗匠的な姿勢に傾き、社交や挨拶、吟行や旅行などと濫作的な傾向を帯びて来たことも挙げられる。

このような問題点があったにもかかわらず、北枝の作品には北陸地方特有の風土色や庶民生活の哀歓など、北陸ならではの素朴な題材を詠込んだ作品が混在していることには注目される。

以上、芭蕉との出会いを前後にした北枝の俳諧活動とその作品について調べてみたものの、現存資料と文献の不足で北枝の人生と俳諧活動の全体図を完成することはできなかった。その全体図を完成するための作業を続けなければならないのがこれからの課題と言えよう。

キーワード：北枝、芭蕉、『卯辰集』、北陸地方、『礼の花』『雪之下草歌仙』

투 고 : 2006. 5. 31
1차 심사 : 2006. 6. 10
2차 심사 : 2006. 7. 1

住 所 : 서울 광진구 화양1동 건국대학교 사범대학 일어교육학과
電 話 : 02-2049-6016
e-mail : hyylee@konkuk.ac.kr

K C I